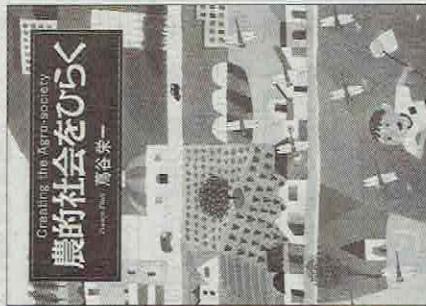


龍谷大学農学部教授
淡路和則

書評

農的社會をひらく

鳥谷栄一・著



農業の存在意義を説くには、理論や思想に基づいて首尾一貫した論を打ち出すか、人々の情感に訴えて共感を得るかであるが、本書はこの両方を見事に駆使している。本書は、市場原理が支配する農「業」では切り捨てられてしまった部分にも目を向けて、「農」という捉え方を示し、農が社会を変革する道筋を描いている。多面的な機能を唱える、ありきたたりの守りの農業擁護論などは異なり、農の持つ社会デザイナー力をダイナミックに説く攻めの姿勢が頼もしい。原発、戦争、公害、食品添加物などによる「生」の状況が、「生きにくい」と感じる農業の広がりに結び付いていふと指摘する。

そして、実例を紹介しな

攻めの姿勢で“愛車”説く

がら、生命原理が最優先され、農と食によって人と人がつながり、コミュニティが形成され、循環をベイスとした自給圏が形成されれば安心して暮らせる社会になることを説いていく。

そのためには地域の条件に合った農の営みが不可欠である。その担い手は大規模経営だけでなく、半農半商や自給的農家など、多様な担い手の組み合わせが重要であり、さらには誰もが参加できる“皆農”を目指している。大小の石が組み合わわることによって強固になる城の石垣を連想させる。

工業的社會となって行き詰まった現代社會を、豊かな農的社會へ導く農の社会デザイン力に大いに期待したい。本書は、社会の大きな課題とその解決の道を、深い洞察から理路整然と優しく生き生きと説いており、実に満喫である。

◇出版＝創森社
◇価格＝1800円
◇著者＝えいいち
農的社會デザイン研究所代表